

トウンリリミス寓話
「魔女と王さま」(前編)



2022/06/22



エリー



目次

0	風の魔女	1
1	バニラ 1 魔法使い試験	3
2	バニラ 2 舞踏会	8
3	バニラ 3 改革	13
4	クミン 1 美しいもの	17
5	クミン 2 憧れ	23

0 風の魔女

0-1 グリーンさま

風は情報を表す。

古い時代、魔女たちは風と化してほうきで空を飛び、実情を探り、より良き未来を選択してきた。

すべては宇宙生命体である神グリーンさまのために。

人は神の細胞。神の一部。

人が健やかなら神も健やか。

人が病めば神も病む。

けれども神は自分ではどうすることもできない。律動に従うだけで自ら動けない。あまりに存在が大きすぎるため、小さい存在のわたしたちが体を保つ。

風の魔女の信仰は異端と退けられ、自然は破壊された。

二度の世界大戦が起きた。

科学が隆盛を極めて多くの人には使えるが理解できない世界になる。

豊かにはなったが失ったものも大きい。

失ったものを取り戻すため、風の魔女たちは並行世界に希望を求める。

0-2 並行世界

風の魔女たちは、わたしたちの世界をガールナルミスと呼ぶ。意味は原点神話。

並行世界は波と粒子の性質を持つ。位置で時間の進み具合が変わる。

最先端はわたしたちが暮らす 21 世紀。

最後尾はトゥンリリミスと呼ばれるまだ電気も蒸気機関もない中世の世界。

2つの世界は、呼吸を極めた魔女たちによって、精神世界で交流している。

トゥンリリミスでは、ガールナルミスでは異端のグリーン教が国教として信仰されている。

そのため神の体内を荒らす戦争は悪と認識されている。

風の魔女たちの願いは1つ叶う。

次は貧困を回避したい。

ガールナルミスの反省から、トゥンリリミスでは新しい試みが望まれる。

魔女と王さまはそんなお話。

1 バニラ 1 魔法使い試験

1-1 王の役割

王子バニラは小さい頃から活発で利発。そして国中の誰より美しい。

16歳で成人すると誰もが妻になりたがる。

プラチナに輝く柔らかな頭髪。垂れ気味な大きな水色の瞳。すらりと通った鼻筋。ふっくらとした淡い珊瑚色の唇。何より印象的なのはコロコロ表情を変える感情豊かな顔そのもの。

王子バニラに微笑みかけられ喜ばぬものはいない。

バニラ自身も自信を持っていた。自分こそが国を繁栄に導く要。

いろんなアイデアを考えて、父王にやらせて欲しいとせがんだ。

街道を整備させて作物を流通させよう！

農具を改良して生産量をあげよう！

保存できる食べ物を開発しよう！

父王は首を横に振る。

「王は勝ち馬を見抜き金を流すだけでよい」

「そんなの卑怯だ」

「個人が負けても再起できる。しかし国が破綻すれば難民になる。リスクを抑えて利益を最大にするのが王の役割」

繰り返されるやり取りにうんざりで、意味を理解しないさまを見て、父王は言う。

「バニラの計画が成功するか試してみるがよい。王子の名を出さず、1週間で土産を100個売りなさい」

実力を証明するチャンスを手にしたバニラは小躍りする。

1-2 真実を告げるもの

王子バニラは、特産品の杉の木を使って木彫りの小箱を作るアイデアを出す。

側近たちは誉めそやす。

早速職人にサンプルを作らせる。

王子バニラが書いた図案は昨年城下町で流行ったデザインだったので売れ残りを持参する。

バニラは大変気に入って、すぐに100個の契約を結んでしまう。

子供時代に一緒に修行した兵士アーモンドに自慢するため見せに行く。

「それは去年城下町で流行った土産物。売れ残りを押しつけられたんじゃないかね？」

「そんなはずない。僕がデザインしたんだから！」

友を退け、側近を信じる。

そして商人に頼んで商品をおいてもらう。

魔法使いに変装して仮面をつけたバニラが物陰から売れ行きを見守る。

1時間経っても誰も手に取らない。

友の話は真実なのか不安になる。

そして1週間、見張り続けた。

1-3 反省の方向

木箱は1つも売れなかった。

王座の前に100個の売れ残りを積み上げられ、王子バニラは恥ずかしさで青くなる。

父王は言った。

「抱えた在庫は国の負債であり、国民の負担」

「アイデアはよかったのに僕は世の中のことを知らなすぎた。町に出て流行りを学びます！」

父王が期待した反省の方向とは違ったが、「それもまたよし」と止めなかった。

王子の姿ではおべっかを使われる。

魔法使いに変装して目元を仮面で隠し町を散歩しよう。

まずは兵士の詰所にいるアーモンドに謝りに行こう。

1-4 占い

詰所に行くとき身を証明できないバニラは不審者扱い。

捉えられる寸前でアーモンドが出てきて、友人と言ってくれる。

「君のこと信じなかったのに友人と呼んでくれるのか」

「まあね」

にかっと笑うと黙って歩き出す。

なんとなくバニラはついていく形に。

酒場に着くと奥の席に占い魔女が座っていた。

仮面を被ったバニラを見ると手招きする。

「言えない高貴な生まれだね。どれ未来を見てあげよう」

カードを出すと時計回りに混ぜて3枚並べる。

「過去は法王5逆で牡牛座。よいアドバイスが得られず、五感の使い方を誤った」

ぐふ。痛いところを突かれる。

王子バニラを見てあたっていることを確信した魔女は続ける。

「現在は吊るされた男12正で海王星。長く身動きできずに空想する。もしかすると片想いかもしれない」

4年後、20歳になったら10月31日に舞踏会を開く予定がある。

「未来は塔16正で火星。好きな人が振り向いてくれた時、大改革がおきるだろう。そし

て戦いが始まる」

まったくロマンチックではない展開に、いったい自分はどんな人を好きになるのか興味を持つ。

もっと聞こうとすると魔女が唇に指を当てる。

「楽しみはとっておきなさい」

お礼にビールを1杯おごって席を離れる。

椅子に座りながらアーモンドが言う。

「俺は悪魔15逆で山羊座。女教皇2正で月。塔16逆で火星だった。城から解放されて、お堅い女に仕えて、改革するって。まさか同じ女とか？」

アーモンドはピーナッツを放りあげて口でキャッチするとビールを流し込む。

まさかと思いつつ、バニラも真似る。

うまくキャッチできずにピーナッツは床に転がり、酔っぱらいに粉々に踏み潰された。

1-5 魔法使い修行

城に帰ると父王に魔法使いの修行がしたいと言う。

国政を学んでほしいが、やって損はないだろうと許すことに。

翌日、魔法宮で一番偉い魔法使いゲウムが教育係として教えに来る。

「バニラさまは何がしたいですか？」

「僕はほうきで空を飛びたい！」

腰の辺りからほうきにまたがってふわりと落ちる練習から始める。

「着地するときは必ず足から。そして地面を蹴って反動で飛ぶのです！」

バニラは素養があった。6回目でふわりと飛んだ。蹴っては浮かびを繰り返して、庭を一周する。

「初日でそれだけでできれば十分」

「もっと高く早く飛びたい！」

渋い顔で首を横に振るゲウム。

「空気の抵抗を受けてコントロールが難しく危険なのです」

空に向かって急上昇できたらどんなにかっこいいだろう。バニラは未来を夢見てわくわくする。

1-6 魔法使い試験

王子が王子として出掛けると大事になる。

だからといって変装して一人で歩けるのは城下に限られる。

田舎や山奥や海辺は見たことがない。

本でしか知らない。

いろんな地域や国のことを読んで知る。

さまざまな文化を学び、特産を知る。

誰が花嫁になっても対応する自信があった。

そして4年の歳月が流れる。

バナラは王になる跡継ぎ。ゲウムの指導のもてこっそり国政に必要な知識を中心に教え込まれていた。

前回の試験は16歳だった。魔法使いの学校は4年ごとに募集される。今回は20歳。

1月に魔法使い試験の発表があり、試験は4月とある。

4年間でほうきで空を飛び、本で知識を身につけた自分は魔法使いにふさわしいと考えたバナラは、父王に試験に出たいとねだる。

思ったのと違う方向に進んでることに戸惑う父王は、教育係ゲウムに助けを求めて見つめる。

視線に気づいたゲウムは言う。

「将来の右腕がないならでなさい」

自分が一番と信じて疑わないバナラは出られると確信する。

部下が見つからないことに危機感を持たないさまを見て父王は不安に思う。

しかしゲウムには心当たりがある。

1-7 ニニー

4月の試験の日、誰もいない暗い階段を一人の少女が昇っていく。

螺旋階段はどこまでも続き、出口がなかなかみえない。

カツ、カツ、カツ。

小気味良く歩き続け、最上階の扉を開けると城の塔に出る。

肩で揃えられた赤みかがった金髪は風に揺れ、つり気味の赤茶の瞳は好奇心にキラキラ輝き、薄紅色の薄い唇は微かに歌を口ずさむ。

「なーなーなー♪」

グリーン教の祭典の歌だった。

外に広がる城下町の景色を眺める。

彼女の名前はニニー。16歳。

ゲウムの養女で姪っ子。

1-8 魔法使い試験

魔法使い試験は、ほうきにまたがり、2階建てのベランダの手すりから飛び降りて、地面に着かずに飛ぶこと。

高さが高くなればスピードがつくため、縦の運動を横にするのが難しくなる。

つぎつぎ地面に叩きつけられていく。

父王と共に同席した王子バナラは自分ならできると自信を持つ。

そして最後にニニーの名前が呼ばれる。

一瞬、間があき、塔から返事が聞こえる。

みんなが注目する。

ほうきを手に持ち、ニニーが窓枠に立つ。

「あぶない！」

思わずバナラが声をあげる。

次の瞬間、ニニーが頭から落ちる。

地面スレスレでほうきに飛び乗る。

バナラの横を超低空飛行で滑走してそのまま急上昇する。

「王子ったらなにその顔！」

雲を突き抜けたニニーはぶっと吹き出す。

1-9 フォーリンラブ

驚きすぎでぼかんと口を開けるバナラ。

合格の声に我に返り、思わずつぶやく。

「妻にほしい」

隣で聞いていた父王が興味深げにうなづく。

「ならば10月31日の舞踏会に招待しなさい」

元気一杯にバナラはうなづく。

何も知らないニニーはゲウムに叱られる。

「王子をからかわない！」

「はーい」

全然懲りてないニニーは運命を知らない。

2 バニラ 2 舞踏会

2-1 開催準備

4月の魔法使い試験はニニーが首席で合格する。グリーン教を信仰するトゥンリミスでは魔女は尊敬されている。妻にめとるのに誰も文句は言わないだろう。

10月31日の舞踏会に向けて、バニラは完璧を求めて準備した。

まず招待客の出身地と年齢と略歴を暗記する。

どの客も公平になるよう各国から特産品を取り寄せる。

一番身分が高いのはグリーン教の聖地サンサリーンの王女クミン。まず彼女から挨拶するのが礼儀だろう。

しかし最初のダンスはプロポーズの意味がある。必ずニニーと踊る。

固い覚悟で当日に望む。

2-2 舞踏会開催

舞踏会は夜7時の会食から始まる。

分かりやすく一番端にしたニニーの席は空いている。

バニラは焦る。ダンスは朝まで続くのだから0時まで待とう。でもニニーが来るまでダンスしないでどう切り抜ければいいのか。

夜10時に会食がおわり、ダンスが始まる。

まず一番身分の高い王女クミンが挨拶に来る。

「ごきげんよう。心配りの素晴らしい舞踏会ですわね」

「ありがとうございます。サンサリーンの特産のココナッツジュースがあります。わたしもヤシの木に登ってみたい」

クミンがクスッと笑う。

「あらわたしの幼少時代を御存じみたいね」

「有名ですから伝わってます」

バニラの人懐っこい笑顔に釣られて周りの人々も微笑む。

一団になり、ココナッツジュースを飲みに行く。

クミンは入り口をチラチラ見るバニラの様子が気にかかったが、なにも言わない。

2-3 ダンス

王子の結婚相手は一人。最初に踊った相手にプロポーズして承諾されると、他の人々のプロポーズが始まる。

男も女も、誰を選ぶかそわそわしていた。
けれども肝心の王子が誰とも踊らない。
誰も踊らないフロアに音楽だけが流れる。
ピンチに気づいたアーモンドがバニラのそばに行く。
ベランダに出たバニラは、アーモンドに頼む。
「実はニニーという魔女見習いを待っている。0時の鐘が鳴る前に連れてきて欲しい」
アーモンドが胸を二回叩く。
「まかせろ」
バニラはそのままベランダで入り口を見て過ごすことにする。
やりとりを陰で見ていたクミンはニニーが来なかったら声をかけようと決意する。

2-4 儀式

街は招待されない中年の男女で賑わっていた。
王子の婚約者を選ぶ舞踏会は、街の人にとってもパートナーを見つけるチャンスなのだ。
一通り街を歩いたアーモンドは、塔から辺りを見渡す。
城の森にぼんやり明かりが見える。予感がして駆けつける。
円の中に六芒星を描き、6つの角にろうそくを立てて、中央で祈りを捧げる魔女見習いを見つけ、そっと近づく。
一心不乱に呼吸を繰り返し、祈る姿に神聖さを感じたアーモンドは悩む。
この人がニニーだろう。今なら0時までに戻れる。しかし彼女は王妃より魔女がふさわしいのではないか。
儀式を中断させることも危険だ。
なにをしているか知らないが、彼女がしたいことをさせるのが愛ではないか。
バニラはどちらを望むだろう。
いや、俺はどうしたい。
……見届け、たいかな。
見届けよう！
頂点まで高まった呼吸音が不意に止む。
一瞬、天に昇るニニーの幻を見たような気がした。
アーモンドはそっとその場を離れた。

2-5 0時の鐘

ベランダでバニラが待っているとアーモンドだけが帰ってきた。
「儀式をしていて止めてよいのか分からなかった」
「舞踏会の日？」
ゴーン、ゴーン……。
無情にも0時を告げる鐘が鳴り出した。

これ以上みんなを待たせることはできない。

王族としての役目を果たさねばならない。

ベランダから部屋に戻るとクミンが近づいてきた。

「想い人がいたのね。でも王妃の立場は望まなかった。わたしは違うわ」

バナラは思った。ニニーは魔女として生きることがふさわしい。4年後に卒業したら王宮つきとして右腕になってもらおう。それでよい。

「国に縛られることになれたあなたが王妃にふさわしい。最初のダンスを踊ってください」

バナラが膝をつき手を差し出すと、クミンがそっとのせた。

クミンの手の甲にしたキスが、婚約決定の合図になり、待ちかねた人々はそれぞれ想い人をダンスに誘い始めた。

中心で華麗に踊るバナラとクミンはみんなの憧れの的だった。

2-6 卒業式の朝

城は小高い丘の上に建つ。

中央が三階建てで、左右に5階建てくらいある塔が並ぶ。

左手の塔の脇に魔法宮の校舎があり、聖なる森に続いている。

城を中心に森と庭をぐるりと囲う城壁があり、四方に城門がある。中央の門はひときわ大きい。

王族の部屋は城の中央で、ベランダから魔法宮のニニーたちがほうきで飛ぶ姿がよく見えた。

そして4年たちバナラは24歳になる。

座学でも、実技でも、実習でも、ずっと首席であり続けたニニーが王宮つきになることは確実に思われていた。

嬉しくて庭で朝食を食べている間、絶えずニコニコしているバナラを見て、クミンは何か言いたげだった。

けれど結局何も言わず、たた一言。

「ニニーが王宮つきになるといいですね……」

まるでならないかのように言われて驚きの表情で返す。

「なるさ。僕はこの日をずっと待っていたんだから！」

食事もそうそうに立ち上がるバナラをクミンはただ見送った。

2-7 卒業式

10人ほどの魔法使い見習いが並ぶ式典に、王族として同席するバナラとクミン。

王宮つきは最初に告げられるはず。

ニニーと呼ばれる瞬間を待望する。

けれども違う名前が呼ばれた。

首席のニニーが最初に呼ばれない事態に参列者は混乱する。

ざわつく中、最後に一番成績が悪いものに押し付けられる辺境使いが告げられる。
「辺境使い、ニニー！」
立ち上がり、バニラが椅子を倒してしまう。
舞踏会に来ない。
王宮つきにもならない。
そんなに僕が嫌いなのか。
バニラの絶望は深く、目頭を押さえた。
参列者で涙の意味を知るものはクミンだけ。
ニニーは何も知らない。
クミンは心からニニーに王宮つきになってほしかった。舞踏会に来なかった者を調べさせて、ニニーについて知ったからだ。
さまざまなエピソードを聞き、バニラだけでなく、クミンもニニーのファンになっていた。
ニニーはなぜか志願したと聞く。なにか理由があるのだろう。自由にさせてあげたい。翼を折らないでほしい。

2-8 ターニングポイント

部屋に引きこもり、ひとしきり泣いた後、唐突に扉が開く。
心配して待っていたクミンを見て、バニラは肩をつかみ揺らす。
「わたしは王族なのだから命じればいい。右腕はニニーしかいない！」
ハラハラと涙をこぼすクミン。
「お気持ちは分かりますが、ニニーには事情があるのかも。好きにさせてあげましょう。わたしたちの分も」
激しく首を横に振り否定するバニラ。
「この先、何十年も離ればなれなのだぞ。そんなの耐えられない」
バニラを抱き寄せ、クミンが頭をなでる。
「立派な王になり、ニニーがどこにいても安全な国にしましょう。わたしが共に歩みます」
クミンの深い愛情に胸打たれ、子どものようにうなづくバニラは王としての目的を持つ。

2-9 旅立ち

ほうきに乗り、城から旅立つニニーは情熱に満ちている。
こっそりベランダから見送るバニラは使命感に燃えている。
視線を移すと、バニラにニニーの警護を頼まれたアーモンドが城門で手を上げた。
腹心の友にニニーの様子を手紙で知らせてくれるように頼んだのだ。
万感の思いを込めてバニラは手を振り返す。

3 バニラ 3 改革

3-1 山奥の村

バニラがいずれ治める国は、大陸の南に位置する。農業と林業が盛んでエルメダーラ王国という。

山を挟んだ北に工業が盛んなルビマンダ共和国がある。

エルメダーラ王国の南東の島国がグリーン教の聖地サンサリーンで観光立国。

ニニーが赴いた辺境とは、エルメダーラ王国とルビマンダ共和国の国境となっている広い山岳地帯を指す。

国と国は友好関係にあるが、ならず者の隠れ家になることが多いため、魔法使いが空から巡回して警戒している。

広くて静かな場所なので、引退した魔女や魔法使いも多く住む。ニニーの目的の一つは彼らに会うこと。

そして真の目的は.....。

3-2 手紙

「バニラさまへ

辺境は土地が痩せていて作物がとれない。

道も悪く、物が無い。

石ころばかりなのにくわが銅で弱く、鉄の技術者にきて欲しいところだ。

追伸

ニニーはモモという子どもに懐かれてうまくやってる。

アーモンドより」

手紙を読んだバニラはがっくりした。

ほとんどニニーの様子が分からないからだ。

そういえばアーモンドは昔から武芸は達人だが、文才はない。

「人選を間違えただろうか.....」

しばしば沈黙した後に、馬が通れる道を作るため、辺境に人を送るよう進言することを思いつく。

3-3 道路作り

昼間の仕事が終わって夕飯を食べ終わると、ニニーとアーモンドは道の補修に努めた。

魔女といってもほうきで空が飛べるだけで、魔法でばばっと解決することはできない。
石や木をどけて、馬が通れる幅を確保していく。
それは気の遠くなる地味な作業だった。
村人は無関心だった。
モモという少女だけが手伝ってくれた。
3ヶ月経つと村人もちらほら手伝うようになる。
食後の2時間だけみんなで祭典の歌を歌いながら作業する。
そんな平和な日々が続いた。
するとある日、王都の兵士たちが手伝いに来る。
「ここはわたしたちでなんとかするので、他を優先してください」
ニニーの言葉にアーモンドは複雑な気持ちになる。
きっとバナラがニニーのために送った手伝いだろう。断られたと知ってはショックを受けるかもしれない。
「報告はしなくていいよ。俺がするから」
兵士にそう告げた。
みんなもやる気だし、何よりニニーとの作業の時間を邪魔されたくなかった。
「バナラさまへ
道作りは順調。
愉快。愉快。
アーモンドより」
嘘はついてないとアーモンドは思う。

3-4 ルビマンダ共和国

バナラとニニーが会ってから10年が経った。
バナラは30歳。ニニーは26歳。
父王が引退して、王バナラになる。
道路網は完成して、国内を馬が駆け抜ける。
庶民も色んなことを知るようになる。
実権を握ったバナラは、すっかり父王の考え方を受け継ぎ、うまくいっていることを引き立てて国を榮えさせていた。
森林を抜けて国境を越えればルビマンダ共和国に着く。鉄製の道具を大量に生産している。
ならば、彼らの力を利用しない手はないのではないだろうか。
しかし自ら計画して失敗すれば国が傾く。
外交を商人に任せて、うまくやったものを引き立てよう。
そのためには国境を開き、人の往来を盛んにするとよいだろう。
王バナラの決断を人々は喜んだ。

3-5 モモの旅立ち

国境が開かれたことを知ったニニーは、科学技術者を目指すモモを連れて、ルビマンダ共和国の首都を目指した。

ニニー一人ならほうきで山を超えられるが、モモも一緒なので港から船で渡る。

そして生まれて初めて蒸気機関車に乗る。

なんて迫力！

真の目的まで急がねばならぬことを悟る。

3-6 貧困改革

出会いから 30 年経ち、バニラは 50 歳、ニニーは 46 歳になる。

城の窓から飛ぶ鳥を眺めるバニラがポツリとつぶやく。

「ニニーは自由な鳥。王宮にはこないだろう」

隣に寄り添うクミンが微笑みかける。

「国境も開かれたことですし、ニニーが地球のどこにいてもいいようにしましょう」

手に手を取るバニラとクミンの目尻に笑いシワができる。

「そうだな」

そのためには貧困改革をせねば。

世界中からアイデアを募集しよう。

3-7 応募

アイデアは山のように集まった。

しかしどれもぼっとしなかった。

「金を配る」が一番多かったが、動く人間がいなければ解決しない。実務者を育てるプランが欲しい。

不満に思っていて読んでいると、大人が子どもの客になり、体験させて学ばせる教育改革を訴えるプランがあった。

ほう。なかなかのアイデアだ。だれだろう？

「辺境使いニニー」

立ち上がり、クミンの元へ走った。

「見てくれ。とうとうニニーが答えてくれた。なにがなんでも採用してあげたい。だが！」

頭を抱えてくるくる歩き回るバニラが苦悶の表情を浮かべる。

「好きな人を優先したら依怙贖罪ではないか。為政者としてあってはならぬこと。だが！」

頬を赤らめ、高揚した様子で早口にバニラが語る。

「なかなかのアイデアなのだ。クミンも見るといい」

応募用紙をクミンに渡す。熱心に読む。

「他の人なら迷わず呼んで話を聞いたでしょう。呼ばずに落とすのは不公平では？」

ハッとするバニラに迷いはなかった。

3-8 再会

城門を目指し、ほうきで空を飛ぶニニーの顔は闘志に満ちていた。

4 クミン1 美しいもの

4-1 見られるもの

幼いクミンにとって美は自然そのもの。
青く輝く海に、黒い影となる魚たち。
水色の空に、黄色い太陽。
カラフルな色彩に満ちたたのしい世界。
美とは見て楽しむもの。
自然の中をくるくると自由に跳ね回る。
海で泳ぎ、ヤシの木に登ってヤシの実を取り、穴を空けてココナッツジュースを飲む。
毎日がパーティー。
そんな風にサンサリーンでは、誰もが6歳までは神の子どもとして遊んで過ごす。王族のクミンも例外ではない。
7歳まで生き延びた子どもは半人前と認められ、大人の仲間入りを果たす。
観光客から見られる側になる。
人々の手本となる形式美を体現すること。
それが王族のクミンに課された義務。

4-2 教育係

ペッパー夫人と名乗る教育係が、7歳の誕生日の翌日からクミンについた。
はじめにペッパー夫人はクミンに宿題を出す。
「クミンさまが最も美しいと思う挨拶を明日までに考えてきてください」
クミンは片手を上げたり、腰を振ったり、いろんな挨拶の仕方を試してみた。
最後に逆立ちすることを思いつく。
翌日、ペッパー夫人の前でやってみせた。
「ユニークでほほえましい」
ほめられてクミンは嬉しくなる。
「ではクミンさまの挨拶とわたしの挨拶、どちらが美しいか教えてください」
そう言い残してペッパー夫人は部屋から去る。
そして背筋をまっすぐ伸ばし、流れるような軽やかな足取りでクミンの前に進み出ると右手を折り曲げて軽く会釈した。
いろいろ試したクミンには、ペッパー夫人の動作の難しさが分かる。美しさも理解できる。

けれども口に出すことは抵抗がある。

正しさを示すなら、なぜ考えさせたのだろう？

「伝統的な挨拶より素晴らしい挨拶を思いついたならそれを伝統となさればよろしい。思いつくまでは伝統を見習いましょうね」

心の葛藤を見透かしたかのように、反抗心にとどめを刺され、クミンは礼儀作法を受け入れるようになる。

4-3 サンサリーンの歴史

南東の小さな島サンサリーンは、作物が育たない。

かつては魚を食べて何とか生きていた。

けれども中央の聖なる山を信仰する人々が観光に訪れるようになり、観光立国として豊かになった。

かつての貧しい町並みは一掃され、見映えのよい形式美を追求したのが、今の王家の先祖。

それにより、収入は莫大になる。

住民にも聖地らしさを求めて、独特の衣装や挨拶をすすめた。

クミンが練習している礼儀作法は、形式美の集大成だった。

4-4 王族の運命

冷静にペッパー夫人は告げた。

「角度が一度違います。もう一度」

やっっていて楽しいことはたいてい見て美しくない。

見映えのいい動作は、無理をする。そして作り上げた作法となる。

礼儀作法に縛られて一生送るなら、ルビマンダ共和国で自由に暮らしたい。

思いが募り、ペッパー夫人に打ち明ける。

「結婚せずにルビマンダ共和国で事業を起こそうと思います」

かわいそうにという面持ちでペッパー夫人が答える。

「サンサリーンの女性王族は結婚するか、神に仕えるか」

選択肢がないことを知り、ならば王妃になり美を体現したいと願う。

4-5 異国

ペッパー夫人は位の高い貴族出身だが、三女だったため、比較的自由に結婚相手を選べた。

大恋愛の末に豪商と結ばれ、異国で暮らした経験を持つ。

観光立国のサンサリーンでは、王家が手本となり美ともてなしを体現する。

農業と林業のエルメダーラ王国では国民を競争させて成果を出したものを引き立てる。王は金を流すことで舵取りをしている。

工業が盛んなルビマンダ共和国に王はいない。各地からやってきた開拓者の集まりで対等な関係を築いている。協力と競争を行き来してバランスを取りながら発展している。

だれもがルビマンダ共和国のような自由を求める。だが戦いに破れたものの悲惨さを知れば、集団で組織的に運営する王国の良さも見えてくる。

王国では国民は王の所有物。自らの意思では自由にならず、拘束される。しかし支援もしてもらえる。

話を聞いたクミンは、異国に思いを馳せる。

4-6 英才教育

8年後、クミンは15歳になる。

めきめきと頭角を現したクミンは、誰より美しい少女になる。

黄金色に焼けた肌は健康そうに輝く。

金髪を結い上げ、お団子にまとめ、前髪を左右に垂らす。

印象的なのはクリクリした真ん丸い黒い瞳。

可憐という言葉が似合う。

しかしにこやかな見た目とは裏腹に、一瞬見せる寂しそうな影のある眼差しが、ミステリアスな雰囲気醸し出す。

王妃を目指すと決めたが、クミンは伝統を守る生き方に疑問を持ち、人生に迷っていた。

それでも王妃というゴールだけを目指して進み続けるしかない。

たとえ虚しくまちがった希望でも、何もないより安堵できた。

4-7 王妃の役割

ペッパー夫人は最後の授業として秘伝を授けた。

「王は事実に注目して現実的な対応をします。では王妃は？」

クミンはこれまでならったことを思い返し、考えを口にする。

「事実に対する人々の反応を見て、感情に寄り添い、希望になります」

パチパチパチパチ。

ペッパー夫人は心から拍手した。

「素晴らしい。クミンさまならどこへ出しても恥ずかしくない立派な王妃におなりでしょう」

満面の笑みを浮かべて手を差し出す。

「ありがとう」

抱擁しながら、ペッパー夫人は中途半端を許さず、徹底して押さえつけて叩き込んだ礼儀作法を打ち破り、クミンが新風を吹き込む嵐となることを願う。

夫人の真意を知らないクミンは、核心的なアイデアが出せないため、守るだけで挑戦できずにいた。

4-8 パーティー

16歳で成人したクミンは、国内の貴族のパーティーに出席するようになる。
王女であるクミンは誰からも注目される。
視線を一身に浴びてもひるまず、完璧に礼儀作法をこなす。
形式美に隠れて誰も素顔を知らない。
誰もがミステリアスなクミンに一目置いた。
洗練されたドレス。
優雅な身のこなし。
そつのない会話。
どこから見ても一流と呼ぶにふさわしい。
いろいろな男性にダンスに誘われた。
けれども王妃になりたいクミンはやんわり断る。
そうして2年たちクミンは18歳になる。

4-9 招待状

エルメダール王国の期待の王子バニラから舞踏会の招待状が届いた。
クミンが招待状を眺めていると妹が寄ってきて羨ましそうに言う。
「エルメダール王国の王子バニラは美しくて賢くて優しい方だそうよ」
噂はクミンも知っていた。
「あなたも舞踏会に参加なさるの？」
妹は首を横に振る。
「わたしは神に仕えるの」
……そちらに決めたのね。
「わたしは必ず王妃になるわ」
すくっと立ち上がり、決意を述べてクミンはサンサリーンを発った。

4-10 舞踏会

舞踏会では、壇上にエルメダール王国の父王と王妃、王子バニラが並んでいた。
一番よい、中央のバニラの前にクミンの席が用意されていた。
バニラの食事のマナーを見る限り、礼儀作法に問題はなさそう。
きっと王族だから礼儀作法を厳しく叩き込まれたのね。
会話はどうかしら？
話してみたい。最も位が高い王女である自分が最初の挨拶をしなければみんなが遠慮してしまうだろう。
「ごきげんよう。気配りの素晴らしい舞踏会ですわね」
長い船旅で疲れた体には、故郷の食材はありがたかった。
「ありがとうございます。サンサリーンの特産のココナッツジュースがあります。わたしもヤシの木

に登ってみたい」

そんなことまで調べているの？

クミンは完璧なもてなしをするバナラに好感を持つ。

バナラはニニーと出会ってなければクミンを妻に望んだらと思う。

話してみて身分も容姿も教養も申し分ない素敵な女性と思う。サンサリーンとの架け橋になってもらいたい。いい印象を与えねば。

期待以上の好意を引き出し、クミンはダンスに誘われることを期待する。

けれどもバナラはしゃべってばかりでまったく踊る気配がない。

さっきから何度も入り口をチラチラ見ている。

誰かを待っているの？

どんな人なのか興味がわいた。

4-11 ニニー

すでに夜 11 時を過ぎた。

1 時間以上、誰も踊らない異常な状態が続いている。

想い人を誘いたい参加者がざわつき始めた。

バナラがどう対応するのか、クミンは成り行きを見守る。

王子バナラと兵士がベランダにこっそり抜けていく。

「……魔女見習いニニーを探してほしい……」

……残念、やはり待ち人が……。

クミンは思う。

もし、0 時までニニーが来なかったなら……。

4-12 決断

0 時の鐘と共に王子バナラがベランダから戻ってきた。

バナラはどうする？

辺りを見回すバナラを見て、クミンは素早く近づいた。

いつまでも嘆かずに決断した。なんて素晴らしい。きっと素敵な王になる。

わたしも勇気を出さなければ！

「想い人がいたのね。でも王妃の立場は望まなかった。わたしは違うわ」

わたしを選んでほしい！

職業王妃でいい。愛されなくてもいい。

ひざまづきバナラがクミンの手にキスする。

一段と盛り上がる音楽の中、みんなが踊り始める。

4-13 決意

幸せそうな笑みを浮かべてクミンは完璧に踊った。

王妃にさえなれば愛など要らない。

王族同士は政略結婚。

頭では理解できても、心が落ち着かず空虚さを感じた。

王妃を目指して美を追求してプロポーズされたけど、この先何を目指したらいいの？

燃え尽きたクミンの心に王妃を蹴ったニニーへの興味がちらついた。

5 クミン2 憧れ

5-1 身辺調査

プロポーズを受け、クミンは正式にエルメダーラ王国で暮らすようになる。

母国サンサリーンから連れてきた執事にニニーについて結婚の準備中に調べさせた。

そしてあの有名な初代魔法使いマグノリアの孫と知る。

クミンの記憶によれば、マグノリアはほうきで地球7周はしたと語られる伝説の人物。

東から西、北から南、東北から南西、東南から西北。それだけで4周はしている。

聖地から聖地を巡り、残り3周する。

最後に聖なる山のあるサンサリーンにこもり、グリーンさまに恋の歌を捧げ続けた。

3ヶ月飲まず食わずで歌い続け、死を覚悟したその時、島中の人々が音楽を聞く。

グリーンさまがマグノリアの呼び掛けに応えたと考えたサンサリーンの民は、返礼の歌を作り、祭典を開いた。

マグノリアの呼び掛けの歌。

グリーンさまの祝福の旋律。

返礼の祭典の歌。

3曲を聖典としてマグノリアを教祖とする新グリーン教を興そうとした。けれども肝心なマグノリアが行方をくらませてしまう。

後世には神のためにそれぞれが考えて行動する教えだけが伝わる。

サンサリーンの長い信仰の歴史の中で、新たな解釈を見出だし、古い考えを拡大する。

そして開拓精神に目覚めた人々は未知の大地を求めて山を越え北を目指す。王を持たないルビマンダ共和国が生まれる。

マグノリアの血を引くとなれば、期待も大きく、拘束されるはず。なのになぜ舞踏会に来なかったのだろう。

クミンはますますニニーに関心を持つ。

5-2 灯火

報告書の最初に、魔法使い試験で塔から落ちて急上昇したとあり、クミンはビックリしてしまう。

死の危険より人を驚かすことを選ぶなんて、なんて奔放な人だろう。

授業が始まってからも、教えられたことを本当か何でも試すので、失敗も多く怒られてばかりだったらしい。

罰を与えられてもまったく懲りずに、とうとう周りがあきらめてしまう。

なぜなら、試してみているような発見があって役立ったから。

たとえば、「ハーブは朝摘むのがよい」と聞けば、朝と昼と夜と夜中に摘んで、成分が変わるか比較してみる。

結果、成分が変わることがわかったため、定説が覆されることになる。

目的により、摘むべき時間帯を変えるようになる。

「ほら、やってみないとわからないでしょ？」

教えられたことを鵜呑みにしないニニーの姿勢に刺激されて、周りも気づいたことを試すようになる。

みんな深夜まで実験を繰り返して、朝食の時間に報告し合うようになる。

クミンは思う。

わたしも最初の一回でやめずに挑戦していたら今頃違う結果になっていたのかしら？

いいえ、伝統を守る人間がいるから自由に振る舞える。わたしは受け入れ受け継いだのだからそれでよい。けれども子どもたちには向いたことを選んでほしい。

ニニーなら新風を起こせるのでは？

この先もニニーはいろいろな問題を起こすだろう。でも翼を折らないでほしい。自由にさせてあげたい。

まだ見ぬ我が子と、ニニーへの憧れや期待で、クミンの心は明るく照らされた。

5-3 結婚式

結婚式でクミンは、完璧な立ち振舞いと美しさで国民を魅了した。

影のある雰囲気は消えてなくなり、すでに母のような慈愛に満ちた表情を見せ、絵に描いたような幸福な花嫁だった。

バニラもクミンを選んでよかったと心から幸せを感じていた。

5-4 初夜

結婚式の夜、枕の二つ並んだベッドを前にして、クミンは勇気を出して問いかける。

「バニラさまが待っていたのはニニーという魔法使い見習いですね？」

ズバリ聞かれてバニラは照れて赤くなる。

「……うん……そ、そうだね」

クミンがベッドに座ったので、バニラも隣に座る。

うつむきながら、バニラが言う。

「僕は魔法使いになりたかった。実行者として実力を試したかった」

クミンはバニラもまた葛藤があったと知り、親しみを感じる。

「王子だからあきらめたのですか？」

何故だか嬉しそうにバニラが否定する。

「違う。ニニーにはかなわないから妻にと望んだ。でも来なかった。けれど王宮つきになってくれればいいんだ」

きっと塔から落ちたニニーを見て好きになったのだろう。分かる気がした。

「初代の孫ですもの。王妃より魔女が相応しいですわ」

嫉妬もせずニッコリ微笑むクミンを見て、バナラは心から思う。
「クミンが王妃でよかった」
手を取り合うバナラとクミン。
「わたしもです。バナラが夫でよかったです」
両思いなのだとなり、クミンは歓喜した。
「クミン」
「バナラ」
二人は熱い口づけを交わし、初夜を無事に終える。

5-5 誓い

バナラはニニーに憧れていてもわたしも愛してくれる。
愛をあきらめていたのに嬉しい。
ニニーを応援するバナラを支えることは、わたしの願いでもある。
バナラも、エルメダーラ王国も、そしてニニーも、わたしが王妃になって守っていく。
新たな目標ができて、目標を共有するバナラが隣にいて、クミンの人生は明瞭になる。

トッソリミス寓話「魔女と王さま」(前編)

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
